



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004年に退職。Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



「SOS」は何の略？

世界中で用いられていた遭難信号「SOS」は何の略でもなく、単なる信号にすぎない。モールス符号では「····—····」(トトツーツーツトト)と表す。できるだけ送信しやすく認識しやすい信号として「SOS」が選ばれたのである。「Save Our Souls」(我らを救え)または「Save Our Ship」(我らの船を救え)の略という見方もあるが、これは単なる俗説(間違い)。

世界で初めて SOS 信号を発信したのは「タイタニック号」(1912年)と言われているが、それはマルコーニ式電信機を使って初めて SOS を発信したものであり、正確には世界初の SOS 信号を発信したのはアゾレス諸島(大西洋に位置するポルトガル領)沖で難破した スラボニア号という船である。(1909年)

スターバックス(の由来)

「スターバックス」は、ハーマン・メルヴィルの長編小説「白鯨」に登場するコーヒー好きの航海士「スターバック(Starbuck)」と、シアトルの南西部に位置するレーニア山の鉱石採掘場「スターボ(Starbo)」から名付けられた。

企業ロゴには船乗りとの縁が深いセイレーン(ギリシャ神話における、上半身が人間の女性で、下半身が鳥の姿をしているとされている海の怪物)が用いられている。





長期投資仲間通信「インベストライフ」

(追記)「白鯨」は 1851 年に発表されたアメリカ文学を代表する名作で、世界十大小説の一つとも言われており、何回も映画化されている。なお、スターバックは冷静な一等航海士で、船長はエイハブ。

パンドラの箱(最後に残ったのは?)

ギリシャ神話の中に「パンドラの箱(壺ともいう)」の話がある。プロメテウスが天から火を盗んで人間に与えたことに激怒した全能の神ゼウスは、人間に災いをもたらすため神々に「女性」を作るように命令した。神々は女性(パンドラ)を作り、彼女に決して開けてはいけないと言い含めて箱を持たせ、プロメテウスの弟、エピメテウスの元へ贈った。

美しいパンドラを見たエピメテウスは、兄であるプロメテウスの「ゼウスからの贈り物は受け取るな」という忠告にもかかわらず、彼女と結婚。そして、ある日パンドラは好奇心に負けて箱を開いてしまう。すると、そこから病気、貧乏、争い、犯罪など様々な災いが飛び出した。パンドラはすぐに箱のふたを閉めたが、人間世界は災厄が充満し人々は苦しむことになる。箱の中には唯一つ『希望』が残っただけだ。

この神話から、「開けてはいけないもの」「禍をもたらすため、触れてはいけないこと」を意味する「パンドラの箱」という言葉が生まれたのである。

雲泥の差

著しい違いがある、または非常にかげ離れていることを「雲泥の差」というが、この場合の雲は天、泥は地で、天と地ほど大きな差があるということ。

「雲泥の差」は白居易の『傷友』(友を傷む)と題する詩の中の一節「昔年洛陽の社。貧賤にして相提携し、今日長安の道、対面雲泥を隔つ」に由来している。

この詩は、地方に流されて赴任した同僚が貧相な姿で戻ってきた時のもので、役人の悲哀を描いている。中央に残ったものと地方に左遷されたものとは、その処遇に「雲泥の差」があり、くたびれ果てた旧友に「これも世の習い、あなただけのことではない」と慰める詩である

桃栗 3 年、柿 8 年(の続きは?)

「桃栗 3 年、柿 8 年」よく知られたこのことわざには続きがあり、地方によって異なっている。一例を挙げると、「桃栗 3 年、柿 8 年、梅はすいすい 13 年、柚子の大馬鹿 18 年、りんごニコニコ 25 年、女房の不作は 60 年、亭主の不作はこれまた一生、あー、こりゃ、こりゃ・・・」



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ほかにも次のようなものがある。「桃栗3年、柿8年、柚子は9年でなり下がり、梨のバカめは18年」、さらに「桃栗3年、柿8年、柚の大馬鹿18年、銀杏の気違い30年」など。

また、『二十四の瞳』の作者である壺井栄さんは「桃栗三年 柿八年 柚の大馬鹿 十八年」と色紙に書いている。これは茨城県から来ていたお手伝いさんが「柚の大馬鹿 十八年」と口ずさんでいたのが殊のほか気に入っていたため、「二十四の瞳」ゆかりの小豆島にこの石碑がある。



「存亡の機」「さわり」「ぞっとしない」

私は、人一倍「言葉」に対するこだわりが強いだけに文化庁が毎年発表する「国語に関する世論調査」に興味深く見ている。

先月発表された今年度の調査で一番関心を引いたのは、「存続するか滅亡するかの重大な局面」で「存亡の機」（正解）を使う人がわずか6.6%にとどまっていたことである。間違いである「存亡の危機」を使う人が83.0%もいた（分からない等が10.4%）。

また、話などの要点という意味の「さわり」を正しく答えた人が36.1%、話などの最初の部分のこと（間違い）と答えた人が53.3%（分からない等が10.6%）もいたという。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

さらに、面白くない意の「ぞっとしない」を正解した人は 22.8%にとどまり、恐ろしくない(誤用)と答えた人が 56.1%と過半を超えていた(分からない等が 21.1%)。

言葉は「文化そのもの」であり、(確かに時代とともに変化するという一面はあるが、個人的には)多数決で決めてほしくないと思っている。メディアなどは機会あるごとに正していく努力をしていただきたいものである。